

母親の就労が子どもに与える影響(第2報)

—就労意識、性格形成等に及ぼす影響—

久保木 道子

(家庭科教育研究室)

(昭和59年10月11日受理)

I 緒 言

近年、女子雇用者の中に占める既婚者の割合は非常に高くなり、総理府統計局の「労働力調査」によれば、昭和57年には未婚者31.5%に対し、既婚者68.5%（有配偶者58.8%、死別9.7%）となっている。

一方、57年における我が国の女子非労働力人口は2420万人で、非労働力人口の63.9%は「家事」に従事する家庭の主婦層であるが、「通学」は15.7%、「その他」が20.5%となっており、その推移をみると、中でも「家事」層の変動の振幅がきわめて大きい。⁽¹⁾51年以降のその減少は、主婦の労働力化により専業主婦が減少していることによるものであるといえる。しかも、主婦の労働力化は必ずしも子育て後のいわゆる第3期の女性に限らず、25～34歳層の出産、育児期に当たる女性の就労率も上昇し、女性の就労パターンを示すM字型⁽²⁾のカーブが全体に上部へシフトしていることは、「労働力調査」によって明らかにされている。また、「20年後の国民生活の予測調査」⁽³⁾の第2回調査によれば、「出産までは働くが、その後家庭に入り非労働力化する女性」が、「減る」と回答している者は72.1%に達している。従って「出産後も継続して労働市場に残る女性」が「増える（かなり増える、やや増えるを含む）」と回答した者も多く、97.7%を占めている。

しかし、一方では、母親の就労の影響に関する具体的、客観的データが乏しく、共働きの増加と非行の増加との相関関係を立証できないにもかかわらず、共働きに対する批判があるため、不安感や罪障感を抱きつつ就労している母親が少なくないことも事実である。

向後正氏は「働く親自身が共働きのマイナス面ばかりにとらわれることなく、子どもがどんな気持でがんばっているのか、働く親の姿をどう見ているのかなどを正しく理解し、働きに出ることの後めたさなどを持つことなく、子どもに与えるプラスの効果を生み出すことを考え、働くことに自信と誇りを持つ親になるべきである。」⁽⁵⁾と主張しており、この種の発言は次第に高まっている。

そこで筆者は、親の側、子どもの側の調査に偏らず、同一の親と子（小・中学生）を対象に調査した。第1報においては、就労理由や子の寂変感、親の罪障感等に関する受け止め方をさぐり、親と子の両者間にかなりの相違があることを報告した。

本報においては、小・中学生と母親、さらに、その中間に位置する大学生に対する調査を基に、母親の就労や生活状態に関する受け止め方並びに性格形成に及ぼす影響、親和度等についての就労形態別、発達段階別比較を試みた。

II 調査方法

1. 調査対象

小学校2年生、4年生、6年生、中学2年生とそれらの母親並びに大学生を対象にした。なお、大学生は教育学部2年生男女と短期大学2年生を選んだ。

2. 調査地域

地方都市松山市の中心部、周辺部、松山市に隣接する郡部の小・中学校を任意に選択した。大学は愛媛大学並びに松山市内の短期大学において実施した。

3. 調査期間および調査方法

小・中学生および母親に対しては昭和58年12月中旬～下旬に実施した。児童・生徒には校内で回答を求め、母親には児童・生徒の手を経て留置法により回答を求めた。この際、母親の就労の有無には関係なく配布した。

大学生には12月中旬に学内で回答を求めた。内容は主として小学生時代を回想して回答するものであるが、その他、意識調査も付加した。

配布数および回収率は表1のとおりである。小・中学生と母親に関しては、母子双方の回答が揃っているもののみを有効回収数とした。

表1 配布数並びに回収率

	配 布 数	有効回収数	有効回収率
小 学 校	632組	592組	93.7%
中 学 校	339組	317組	93.5%
大 学 (短大を含む)	862枚	814枚	94.4%

なお、回答者の内訳は表2のとおりである。

表2 回答者の学校種別・男女別一覧

	小 学 生	中 学 生	小・中学生 の母親	短 大 生	大 学 生	計
男 子	312	168	—	0	69	549
女 子	280	149	(909)	280	185	894 (909)
計	592	317	909	280	254	2,352

III 結果と考察

1. 母親の就労状況

表3 母親の就労状況

就 労 別	小・中学生 の 母 親	大学生の母親	
		小学生時代	中学生時代
フルタイム	106	91	117
自 営	206	143	149
パートタイム	202	36	64
内 職	64	41	40
その他・無答	36	37	3
(家事専業)	(295)	(186)	(161)
計	909	534	534

母親の就労状況は表3のとおりである。大学生対象の調査では小学校の低・中・高の各学年時の母親の就労状況を尋ねたが、就労別分類はその間の最長就労形態によった。

2. 子どもの年齢と母親の就労形態

子どもの年齢により母親の就労形態がどのように変化するかについて、大学生の回答を基に集計した結果が図1である。回答者自身の年齢と母親の就労形態の関係を尋ねたので、末子の年齢とは多少の差があるが、現在の少子家庭では、大差は見られないものと思う。

それによると、小学校低学年においては就労している母親は過半数であり、家事専業が約42%を占めているものの、子どもの年齢が上昇するに従って母親の就労率は徐々に上昇し、中学生の段階では約70%となっている。自営は同率を示しているが、他は時期により変化をみせている。内職、家事専業は子どもの年齢と共に下降し、フルタイム、パートタイムは上昇している。女性のライフサイクルの変化による子育て後の長い中高年期に備え、女性の就労意識が高まっていることは、この調査においても明らかである。

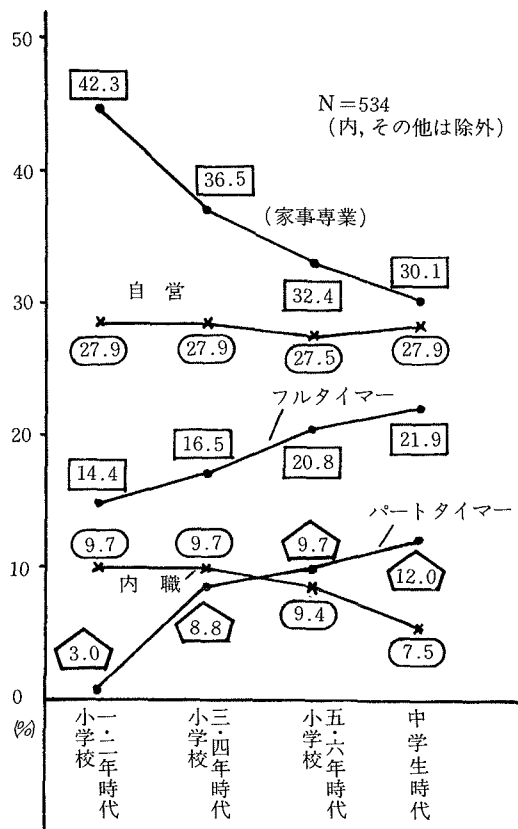


図1 子どもの年齢と母親の就労形態
(大学生の回答)

3. 母親の就労理由

それでは、母親が就労する理由を子どもの側ではどのように捉えているのであろうか。

小・中学生の推測と大学生の回想並びに母親自身の就労理由を比較したものが表4である。

表4 母親の就労理由

(小・中学生の推測, 大学生の回想による推測と母親の回答の比較)

													M.A.		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	N. A.	回答数 (平均回答率)	回答者数
フル タイ マー	小・中 学生	57人 (65.5%)	14 (16.1)	17 (19.5)	7 (8.0)	7 (2.3)	2 (33.4)	3 (0)	0 (0)	0 (9.2)	8 (4.6)	4 (4.6)	4 (4.6)	119 (1.1)	106 (100.0)
	大学生	35 (38.5)	41 (45.1)	16 (17.5)	11 (12.1)	9 (9.9)	8 (8.8)	5 (5.5)	0 (0)	0 (0)	2 (2.2)		1 (1.1)	127 (1.4)	91 (100.0)
	母親	52 (49.1)	33 (31.1)	11 (10.4)	22 (20.8)	13 (12.3)	11 (10.4)	6 (5.7)	0 (0)	0 (0)	3 (2.8)		1 (0.9)	151 (1.4)	106 (100.0)
就 労 者 全 体	小・中 学生	251 (54.0)	85 (18.3)	87 (18.7)	44 (9.5)	19 (4.1)	36 (7.7)	5 (1.1)	20 (4.3)	18 (3.9)	34 (7.3)	28 (6.0)	22 (4.7)	627 (1.1)	578 (100.0)
	大学生	63 (20.3)	103 (33.1)	46 (14.8)	18 (5.8)	16 (5.1)	30 (9.6)	8 (2.6)	31 (10.0)	97 (31.2)	4 (1.3)		3 (1.0)	416 (1.3)	311 (100.0)
	母親	136 (23.5)	143 (24.7)	49 (8.5)	48 (8.3)	20 (3.5)	129 (22.3)	20 (3.5)	56 (9.7)	137 (23.8)	11 (1.9)		3 (0.5)	749 (1.3)	578 (100.0)

〔設問〕 大学生の場合

今、当時の事を考えてみて、あなたのお母さんはなぜ仕事をしておられたと思いますか。一つか二つ選んで下さい。

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 経済的に働かざるを得なかったため | 2 経済的に生活をより豊かにするため |
| 3 子どもの教育費の準備や住宅建築のため | 4 その職業に生きがいを感じ、続けていきかったため |
| 5 子どもを見てくれる人がいたため | 6 時間的に余裕があったため |
| 7 社会との接触を求めているため | 8 自営業であり、母親がその仕事の中心であったため |
| 9 自営業であり、母親の手伝いも必要であったため | 10 その他 |

(注) 小・中学生に対しては「11 わからない」を設けた

設問の表現は、大学生と母親は同一である。小・中学生に対しては理解できる程度に表現を変えたが、内容は同一である。

概観すると、大学生と母親の回答結果は類似しており、小・中学生の回答とはその傾向を異にしている。

就労者全体について見た場合、小・中学生は、「生活のため」「もっと豊かな生活をするため」「教育費の準備のため」という、いわゆる経済的な理由が、M.A.とは言え、90%以上を占めているのに対し、大学生は約70%、母親は約57%と格段の差が見られる。大学生の場合は、小・中学生の群と比較し、家庭の経済状態が多少豊かであるためとも考えられるが、さらに、家庭の生活状態をより客観的に把握できるため、母親の回答に近い結果が出ているとも考えられる。また、大学生、母親は家業の補助者として就労せざるを得ない事情を認めているが、小・中学生はそのような捉え方が極めて少ない。その他、顕著な差異としては、母親の「時間的余裕」22.3%に対し、小・中学生7.7%、大学生9.6%と低率である点が挙げられる。

総じて子の側、特に小・中学生は母親の就労を厳しく受け止めている。特にフルタイムの場合、「教育費の準備や住宅建築のため」と回答している母親は10.4%であるのに対し、小・中学生は19.5%と倍の比率を示しており、大学生も17.6%と、母親の比率を相当上まわっている。反面「お母さんは今の仕事がすきだから」という「生きがい」に相当する小・中学生の回答は8.0%であるのに対し、「生きがい」と回答した母親は20.8%を占めている。大学生の回答率は、12.1%を示し、母親よりも小・中学生に近い値を示している。つまり、子の側では、母親はひたすら子ども達あるいは家庭のために働いてくれていると受け止めており、小・中学生は特にその傾向が強い。

4. 母親の就労と生活状態

(1) 子どもの目で捉えた母親の姿

就労している母親の姿を、子どもの目でどのように捉えているのであろうか。表5に示す設問に対する回答は、必ずしも就労のみに関わる訳ではなく、家族形態、家族構成、あるいは家族の人間関係等、諸々の要因に関わるものであるが、それにもかかわらず、なおかつ、就労形態により異なる傾向が見られる。

表5 子どもの目で捉えた母親の姿（大学生の回想）

M.A.									
	1	2	3	4	5	6	N.A.	回 答 数 (平均回答率)	回答者数
フルタイム	15人 (12.8%)	38 (32.5)	34 (29.1)	2 (1.7)	15 (12.8)	4 (3.4)	1 (0.9)	108 (1.2)	91 (100.0)
自 営	39 (26.2)	53 (35.6)	41 (27.5)	14 (9.4)	15 (10.1)	7 (4.7)	3 (2.0)	169 (1.1)	149 (100.0)
パートタイム	14 (21.9)	9 (14.1)	5 (7.8)	1 (1.6)	4 (6.3)	3 (4.7)	1 (1.6)	36 (1.0)	36 (100.0)
内 職	16 (40.0)	12 (30.0)	6 (15.0)	4 (10.0)	7 (17.5)	7 (17.5)	1 (2.5)	52 (1.3)	40 (100.0)
家事専業	76 (47.2)	61 (37.9)	10 (6.2)	18 (11.2)	24 (14.9)	39 (24.2)	3 (1.9)	228 (1.2)	186 (100.0)

- 〔設問〕 1. 明るく、いきいきしていた 2. 苦勞もあったと思うが生きがいを持っていた
 3. とても疲れたようすで苦勞していた 4. もっと社会に目を向けてほしかった
 5. もっと自分自身のことを考えてほしかった 6. 子どもの世話をやきすぎていた

フルタイムの場合は「苦勞もあったと思うが生きがいをもっていたと思う」「とても疲れたようすで苦勞していた」に集中している。

自営の場合はフルタイムに類似の傾向を示しているものの、「明るくいきいきしていた」という回答は、フルタイムに比較して高く、同時にまた、「社会に目を向けてほしかった」も高率を示している。

内職の場合は家事専業に類似の傾向が見られ、「疲れたようすで苦勞していた」は少く、逆に「明るくいきいきしていた」が多い。また、フルタイムやパートタイムの外勤就労に比較して「もっと社会に目を向けてほしかった」という回答が多いのが特徴である。

パートタイムはフルタイムに類似した点と、内職に似た傾向の二面があるが、これは、パートの勤務に幅があり、長時間勤務の者と短時間勤務の者が混在していることと関わるものと考えられる。

さらに家事専業の場合は「子どもの世話をやきすぎていた」と、過保護を示す回答が圧倒的に高く、また「社会に目を向けてほしかった」「自分自身のことも考えてほしかった」等の母に対する要望も多い。しかし、反面「明るくいきいきしていた」という回答は、全体を通して最高値を占めている。勿論、家事専業であっても老人や病人介護に追われている生活もあるが、一般的には、子どもの目にもゆとりのある生活をしている母親が、明るいと思われたものであろう。全般的に、かなり適確に母親の姿を捉えているといえよう。

5. 子の就労観と寂寥感

(1) 就労観

前述のような母親の姿を見つ、子は母親の就労継続をどのように考えていたのであろうか。

大学生の回想による回答結果は表6に示すとおりである。

表6 母親の就労に対する賛否(大学生の回答)
—就労婦人の子の場合—

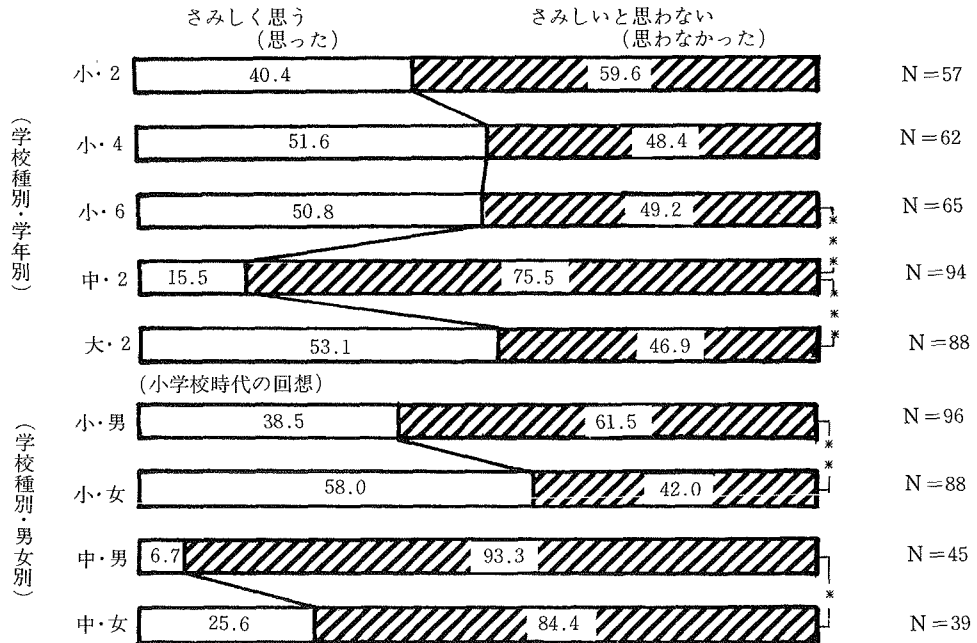
	1	2	3	4	5	N.A.	計
フルタイム	7人 (7.7%)	40 (43.9)	8 (8.8)	36 (39.6)	0 (0)	0 (0)	91 (100.0)
自 営	4 (2.8)	39 (27.2)	18 (12.6)	70 (49.0)	9 (6.3)	3 (2.1)	143 (100.0)
パートタイム	2 (5.5)	14 (38.9)	4 (11.1)	15 (41.7)	1 (2.8)	0 (0)	36 (100.0)
内 職	0 (0)	6 (14.6)	7 (17.1)	27 (65.9)	0 (0)	1 (2.4)	41 (100.0)

〔設問〕 小学校のころ、お母さんの仕事についてどのように思っていましたか。最も近いものを選んで下さい。
 1 仕事をやめてほしかった 2 仕事をやめてほしかったが、しかたがないと思っていた
 3 仕事は続けてほしかった 4 何とも思わなかった
 5 その他

「続けてもらいたかった」「何とも思わなかった」の両群は、内職の83.0%を筆頭に、自営の61.6%、パートタイムの52.8%、フルタイムの48.4%の順となっている。「やめてほしかったが、しかたがないと思っていた」という諦めも相当の割合を占めてはいるものの「やめてもらいたかった」と回答している者は、就労形態により多少の相違はあるが、0%~7.7%と極めて低率である。

(2) 寂寥感

母親の就労を否定しない子は、母親の不在による寂寥感をどの程度抱いているのであろうか。



χ^2 検定 *はP<0.05 **はP<0.01 ***はP<0.001
 (注) 「思う」は「いつも思う」「ときどき思う」を合算し、「思わない」は「あまり思わない」「全然思わない」を合算したものである。

図2 母親不在時の寂寥感の有無

図2に示すように、小学生は「さみしさ」を感じている者が約半数を占めており、学年別に有意差は認められない。ところが、中学生になると寂寥感は急激に低下し、「さみしさ」を感じている者は15.5%に留まっている。また、大学生の回想による値は小学生の回答とほぼ同率で、有意差は認められなかった。

さらに、性別比較を試みた結果は、小・中学生とも男女間に大差があり、女子は寂寥感を抱く率が極めて高い。

次に、「さみしさを感じなかった」と回答した大学生を対象に理由を尋ねた結果は表7のとおりである。

表7 寂寥感を抱かなかった理由（大学生の回答）

	M.A.									回 答 数 (平均回答数)	回答者数
	頻繁では なかった から	慣れてい たから	かえって 自由に遊 べたから	干渉され ないで済 んだから	塾、習い事 に行ってい たから	他の家族 が家にい たから	母の仕事 を理解して いたから	友人がい たから	その 他		
フル タイマー	0人 (0%)	15 (37.5)	5 (12.5)	3 (7.5)	2 (5.0)	15 (37.5)	12 (30.0)	14 (35.0)	2 (5.0)	68 (1.7)	40 (100.0)
自 営	21 (33.9)	10 (16.1)	7 (11.3)	7 (11.3)	6 (9.7)	17 (27.4)	19 (30.6)	22 (35.5)	5 (8.1)	114 (1.8)	62 (100.0)
パート タイマー	7 (53.8)	4 (30.8)	1 (7.7)	1 (7.7)	1 (7.7)	1 (7.7)	1 (7.7)	3 (23.1)	2 (15.4)	21 (1.6)	13 (100.0)
内 職	12 (63.2)	1 (5.3)	2 (10.5)	11 (57.9)	1 (5.3)	2 (10.5)	2 (10.5)	6 (31.6)	3 (15.8)	40 (2.1)	19 (100.0)
計	40 (29.9)	30 (22.4)	15 (11.2)	22 (16.4)	10 (7.5)	35 (26.1)	34 (25.4)	45 (33.6)	12 (9.0)	243 (1.8)	134 (100.0)

〔設問〕 さみしいと感じなかった理由を、今、改めて考えてみると、次のどれに最も近いですか。
(○の数は3つ以内)

全体を通して最大値を占めているのは「友人がいたから」という回答である。次いで「頻繁でなかったから」という自営、内職の場合と推測される回答が続き、また、「母親代りの家族が家にいた」「母親の仕事を理解していたから」等の回答も多い。

就労別比較では、フルタイマー、パートタイマーの場合、「慣れていたから」という回答が多い点は注目される。

従って、これらの回答を集約して逆の表現をするなら、小学生時代には、核家族で友人が少なく、しかも母親の就労の必要性が十分理解できない場合、また仕事を始めた当初には「さみしさ」がつのると言える。しかし、中学生になると、母親の不在はさほど気にならないという結果が出ている。

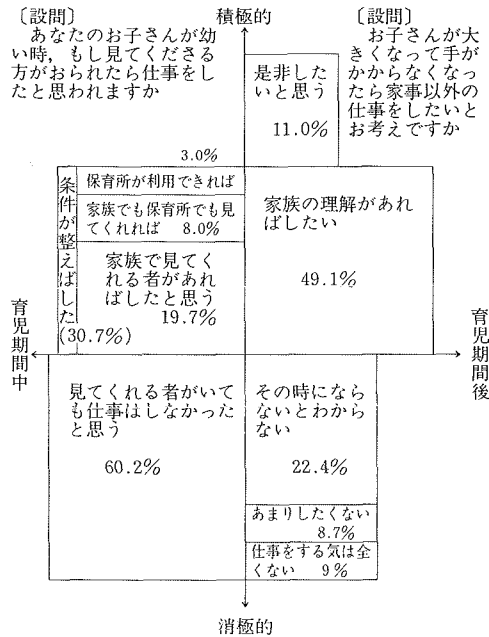
小学生に比較して中学生の寂寥感が弱い点は、子の成長に伴う自立心の伸長によるものと考えられるが、他面、子どもの下校時間が遅いこととも関わっていると思われる。

なお、家族形態やきょうだいの有無等と子の就労観との関わりも深いと考えられるが、この点の分析は次報にゆづることとする。

6 家事専業の場合の就労意識

(1) 母親の就労意識

家事専業の母親は就労に対してどのような意識を持っているのであろうか。小・中学生の母親のうち、現在家事専業である者の回答を集計したものが図3である。



(注) 回答のうち、「その他」は除外
図3 母親の就労意識

育児期間中は約60%の母親が「見てくれる者がいても就労しなかったと思う」と、自らの手で育児をすることの重要性を示しているが、育児期間後はその数が逆転し、就労志望の者が約60%となっている。特に11%の者は「是非したい」と回答している。

因みに、過去の就労経験を見ると、75.7%の者が経験がある。さらに、就労をやめた理由は表8に示すとおりである。

表8 外勤就労をやめた理由（家事専業者、内職者の回答）

	結 婚 の 時	出 産 の 時	子どもがふ えて多忙と なったため	経済的にゆ とりができ たため	本人の病 気、病弱 のため	家族に病 人ができ たため	夫の転勤 のため	転居の ため	仕事に不 満があっ たため	夫の意向 に従った	N.A.	計
人数	119	77	23	12	13	5	8	2	9	2	1	271
割合	43.9	28.4	8.5	4.4	4.8	1.9	3.0	0.7	3.3	0.7	0.4	100.0

家族の意識の変化，社会施設の充実と共にますます婦人の就労率が高まるであろうことは，本調査からも推測される。

(2) 母の就労に対する賛否

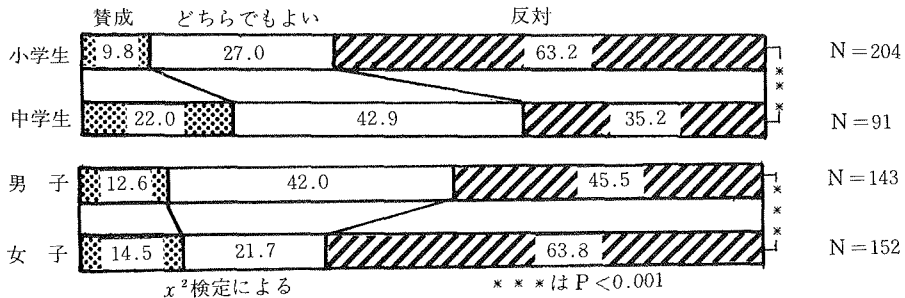
家事専業婦人の子は，母親の就労に対してどのような意識を持っているのであろうか。小学生時代に 貫して家事専業であった母を持つ大学生の回答結果が表9である。

表9 母親の就労に対する賛否（大学生の回答）
—家事専業婦人の子の場合—

	おおいに賛成したと思う	たぶん賛成したと思う	どちらともいえなかったと思う	たぶん反対したと思う	絶対反対したと思う	D. K.	計
男子	1人 (3.4%)	8 (27.6)	6 (20.7)	6 (6.9)	2 (6.9)	6 (20.7)	29 (100.0)
女子	1 (0.7)	32 (23.5)	25 (18.4)	45 (33.1)	14 (10.3)	19 (14.0)	136 (100.0)
計	2 (1.2)	40 (24.2)	31 (18.8)	51 (30.9)	16 (9.7)	25 (15.2)	165 (100.0)

〔設問〕 小学生のころ、もし、お母さんが働きに行かれるとしたら、あなたは賛成したと思いますか。反対したと思いますか。

全体的に見ると、賛意を示したであろうと回想している者は約25%に留り、約40%の者が反対したであろうと回答している。しかし、家事専業の母親の「見てくれる者がいても就労はしなかったと思う」という約60%の回答率よりは低い値を示している点は注目に価する。



〔注〕 「賛成」は「大さんせい」「さんせい」の合算、「反対」は「反対」「ぜったい反対」の合算である。

図4 母親の就労に対する賛否（小・中学生の回答）
—家事専業婦人の子の場合—

一方、小・中学生の回答によれば、小学生と中学生の間に大差があり、賛成は9.8%：22.0%、反対は63.2%：35.2%となっている。

また、男女比較によれば、賛成は大差ないものの反対は女子が圧倒的に多く、有意差が認められる。就労婦人の子の回答に見られる寂寥感が、女子に強く、男子に弱いことと関連のある傾向が表われている。

7 大学生の就労意識

子の立場を経て、現在はそろそろ親の立場になった時の生活設計を頭に画いているであろう大学生は、就労に関してどのような意識を持っているのであろうか。

母親の就労形態別、性別、大学種別に比較を試みた。就労形態別分類は小学生時代の母親の就労形態によったが、この間に母親が二つ以上の形態（家事専業も含む）を体験している場合は、最長期間を占めた形態により分類した。

表10 大学生の就労意識

M.A.

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	N.A.	回 答 数 (平均回答率)	回答者数
フルタイム		22人 (24.2%)	13 (14.3)	13 (14.3)	11 (12.1)	29 (31.9)	8 (8.8)	3 (3.3)	5 (5.5)	24 (26.4)	2 (2.2)	5 (5.5)	130 (1.4)	91 (100.0)
自 営		14 (9.8)	49 (34.3)	16 (11.2)	10 (7.0)	50 (35.0)	10 (7.0)	4 (2.8)	14 (9.8)	25 (17.5)	6 (4.2)	8 (5.6)	198 (1.4)	143 (100.0)
パートタイム		5 (14.7)	7 (20.6)	3 (8.8)	3 (8.8)	13 (38.2)	3 (8.8)	0 (0)	3 (8.8)	6 (17.6)	1 (2.9)	3 (8.8)	44 (1.2)	36 (100.0)
内 職		1 (2.4)	11 (26.8)	5 (12.2)	2 (4.9)	14 (34.1)	2 (4.9)	3 (7.3)	5 (12.2)	8 (19.5)	0 (0)	5 (12.2)	51 (1.2)	41 (100.0)
家事専業		5 (2.7)	80 (43.0)	26 (14.0)	5 (2.7)	76 (40.9)	10 (5.4)	9 (4.8)	12 (6.5)	23 (12.4)	13 (7.0)	3 (1.6)	256 (1.4)	186 (100.0)
大 学 生	男	3 (4.3)	17 (24.6)	5 (7.2)	3 (4.3)	25 (36.2)	2 (2.9)	3 (4.3)	8 (11.6)	14 (20.3)	5 (7.2)	6 (8.7)	85 (1.2)	69 (100.0)
	女	11 (5.9)	42 (22.7)	31 (16.8)	18 (9.7)	48 (25.9)	32 (17.3)	8 (4.3)	13 (7.0)	52 (28.1)	11 (5.9)	11 (5.9)	266 (1.4)	185 (100.0)
短 大 生		33 (11.8)	13 (4.6)	30 (10.7)	13 (4.6)	124 (44.3)	6 (2.1)	11 (3.9)	18 (6.4)	28 (10.0)	9 (3.2)	8 (2.9)	285 (1.0)	280 (100.0)

〔設問〕 自分の子どもの事も考えた上で、今のあなたの共働きについての気持ちや考えに近いものに○をつけて下さい。(○は2つ以内)

- 1 自分がさみしい思いをしたから、自分子どもにはそういう思いをさせたくないので共働きはしたくないと思う
- 2 母親が家にいることによって安心感があったので、自分の子供にもそうさせたいと思うから共働きはしたくないと思う
- 3 だれか家の者で子供の世話をしてくれる者があれば共働きをしたいと思う
- 4 保育所や幼稚園など、集団保育してくれる所があれば共働きをしたいと思う
- 5 子供の手がかからなくなってから共働きをしたいと思う
- 6 もうすでに自分の道を決めており、その仕事を続けたいので共働きをしようと思う
- 7 母親が働いていると自立心がつき、子供にとってプラスの面が多いと思うので、共働きをしたいと思う
- 8 成長した子どもと対等に話ができるように、これからの母親は仕事を持った方がよいと思うので共働きをしたいと思う
- 9 母親も自己の成長のため、ひとりの人間として充実した生き方をするため共働きをしたいと思う
- 10 その他

親の就労形態にかかわらず、「子どもに手がかからなくなってから共働きしたい」という回答が最大値を占めており、幼児期には母親が家庭に居ることを希望している者が37%を占めており、家事専業者の子は「母親が家にいることにより安心感があったので」と考え、フルタイムの母を持った子は「自分がさみしい思いをしたので」と、いずれも自分の体験を通して考えている。

就労形態別に考察すると、フルタイムの場合は、選択肢9の自己成長・自己実現を意味する回答が比較的多く、「成長した子どもと対等に話ができるように仕事を持った方がよい」という回答は、内職、自営、パート等に比較的多い。家事専業の場合は、母親の在宅により子どもが安心感を得ると考えている者が圧倒的に多い点も注目される。すなわち、子はそれぞれの体験を通して、母の姿を肯定したり批判したりしながら自己の道を考えているので、就労別に差異が表われるものと考えられる。

次いで、性別、大学別比較によれば、大学生と短大生の間、男子学生と女子学生の間には差異が見られるが、後者に比較し前者の差異の方がより顕著である。

「子どもに手がかからなくなってから共働きしたい」という短大生の回答率44.3%は、全回

答の中で最大値を占めている。また、選択肢1の母親の不在による寂寥感は短大生に多く、選択肢2の在宅による安心感は大学生に多いという対称的な傾向が表われている。選択肢9の自己成長、自己実現を求める回答は大学生に比較し、短大生はかなり低率となっている点も特徴の一つである。

次に大学生男子と大学生女子（短大生を除く）を比較すると、女子学生に共働き志向者が多く、「もう、すでに自分の道を決めており、その仕事を続けたい」と回答している者が18.4%あり、さらに、「子どもの世話をしてくれる者がいれば」あるいは「集団保育をして貰えれば」共働きしたいと回答している者は26.5%を占めている。

また、母親の自己成長、自己実現のための就労希望は女子学生に多く、成長した子どもと対等に話ができるためにも就労が意味ありとする者は男子学生に多いという結果となっている。子どもの自立心養成に母親の就労が効ありとする者は、男女共に極めて低率である。

8 母親の就労による影響

(1) 母親の就労によるプラスの影響

個人の性格形成や習慣づけに母親の就労がどの程度関わるかについては、これまた論議を呼ぶところであろうが、ここでは、本人がどのように受け止めているかを知ることがを目的とし、表11並びに表12に示す設問により、母親の就労によるプラスの影響とマイナスの影響を尋ねた。

表11 母親の就労によるプラスの影響（大学生の回答）

	1 主体性	2 自立心	3 自主性	4 責任感	5 計画性	6 協調性	7 社交性	8 持久性	9 その他	N.A.	回 答 数 (平均回答率)	回答者数
フルタイム	24人 (26.4%)	33 (36.3)	18 (19.8)	22 (24.8)	12 (13.2)	24 (26.4)	18 (19.8)	37 (40.7)	3 (3.3)	4 (4.4)	191 (2.1)	91 (100.0)
自 営	28 (19.6)	41 (28.7)	50 (35.0)	29 (20.3)	10 (7.0)	35 (24.5)	22 (15.4)	42 (29.4)	6 (4.2)	11 (7.7)	263 (1.8)	143 (100.0)
パートタイマー	8 (23.5)	10 (29.4)	8 (23.5)	10 (29.4)	2 (5.9)	10 (29.4)	6 (17.6)	8 (23.5)	0 (0)	4 (11.8)	62 (1.8)	34 (100.0)
内 職	5 (12.2)	8 (19.5)	8 (19.5)	6 (14.6)	1 (2.4)	6 (14.6)	4 (9.8)	6 (14.6)	6 (14.6)	9 (22.0)	50 (1.2)	41 (100.0)
男 子 学 生	9 (23.1)	12 (30.8)	5 (12.8)	9 (23.1)	3 (7.9)	4 (10.3)	5 (12.8)	11 (28.2)	2 (5.1)	8 (20.5)	60 (1.5)	39 (100.0)
女 子 学 生	56 (20.6)	81 (29.8)	80 (29.4)	58 (21.8)	22 (8.1)	71 (26.1)	45 (16.5)	82 (30.1)	14 (5.1)	20 (7.4)	509 (1.9)	272 (100.0)

M.A.

【設問】 今、考えてみて、仕事のためにお母さんが不在であった事が、あなたにとってプラスになったと思う事があれば、いくつでも選んで下さい。

- 1 すぐ人に頼らず、ある程度自分で考えるなど、主体性が養われたと思う
- 2 自分の事は自分でするなど、自立心が養われたと思う
- 3 自分から家の手伝いをするなど、自主性が養われたと思う
- 4 言われた事はきちんとするなど、責任感が養われたと思う
- 5 物事を考えて行動するなどというような、計画性が養われたと思う
- 6 兄弟で助け合うという習慣が付き、協調性が養われたと思う
- 7 友だちと、すぐ仲よくなるなど、社交性が養われたと思う
- 8 いやな事でも、ある程度耐えられるなど、持久性が養われたと思う
- 9 その他

その結果は、母親の就労形態によりかなりの相異が見られる。フルタイムの場合は持久性の40.7%を筆頭に、自立心、主体性、協調性が、M.A. とはいえ、いずれも25%以上の率を占めている。自営の場合は自立心、持久性、協調性が、また、パートタイマーの場合は自立心、責任感、協調性が25%以上の値を示している。内職の場合はどの項目も一般に低率であり、N.A.

が最大値を示している。

なお、平均回答率を見ると、フルタイムーの場合は2.1の最高値を示し、自営、パートタイマーは共に1.8、内職は1.2となっている。このことから、フルタイムーの場合は、プラスの影響があったと受け止めている者が最も多いといえよう。また、内職の場合は無答者率の高いこととも考え合わせ、母親の就労の影響をあまり受けなかったと感じている者が多いと推測される。

さらに性別比較を試みた結果、男子学生は自立心、持久性を挙げ、女子は持久性の約30%を始めとして、自立心、自主性、協調性がいずれも25%以上の割合を占めている。平均回答率も男子の1.5を相当上廻っており、母親の就労が間接的に自己の精神的成長を促したと受け止めている者が多い。

(2) 母親の就労によるマイナスの影響

表12 母親の就労によるマイナスの影響（大学生の回答）

M.A.											
	1	2	3	4	5	6	7	8	N.A.	回 答 数 (平均回答率)	回答者数
フルタイムー	12人 (13.2%)	8 (8.8)	16 (17.6)	14 (15.4)	13 (14.3)	30 (33.0)	11 (12.1)	0 (0)	4 (4.5)	104 (1.1)	91 (100.0)
自 営	13 (9.1)	22 (15.4)	32 (22.4)	22 (15.4)	15 (10.5)	36 (25.2)	7 (4.9)	12 (8.4)	27 (18.9)	159 (1.1)	143 (100.0)
パートタイマー	6 (17.6)	3 (8.8)	5 (14.7)	8 (23.5)	4 (11.8)	6 (17.6)	3 (8.8)	0 (0)	8 (23.5)	35 (1.0)	34 (100.0)
内 職	0 (0)	2 (4.9)	7 (17.1)	4 (9.8)	1 (2.4)	4 (9.8)	2 (4.9)	4 (9.8)	18 (43.9)	24 (0.6)	41 (100.0)
男 子 学 生	2 (5.1)	4 (10.2)	4 (10.2)	7 (17.9)	1 (2.6)	8 (20.5)	3 (7.7)	1 (2.6)	14 (35.9)	30 (0.8)	39 (100.0)
女 子 学 生	29 (10.7)	33 (12.1)	58 (21.3)	41 (15.1)	32 (11.8)	67 (24.6)	19 (7.0)	19 (7.0)	52 (19.1)	298 (1.1)	272 (100.0)

(設問)同じように、あなたにとって、マイナスになったと思う事があれば、いくつでも選んで下さい。

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 1 親がいる時に過保護なため、ずぼらである | 2 あまり叱言をいわれなかったのでやりっぱなしのことが多い |
| 3 行動をおこすまでに時間がかかる | 4 好きなようにしてきたので生活のけじめがつかない |
| 5 進んで物事をするという自主性がない | 6 自分の中にとじこもってしまう事がある |
| 7 しつけられる時間が少なかったので基本的生活習慣が身につけていない | 8 その他 |

一方、母親の就労がマイナスになったと思う点を尋ねた結果は、表13に示すとおり、男女共に「自分のからに閉じこもりやすい」という回答が最大値を占めるものの、いずれも25%未満である。平均回答率も男子学生0.8、女子学生1.1となっており、プラスの影響に比較して極めて低く、またN.A.の割合も極めて多い。このことから、マイナスの影響は受けなかったと解している者が多いと考える。但し、就労別に見ると、フルタイムー、自営の場合に「自分のからに閉じこもりやすい」と回答した者が多く、特にフルタイムーの場合は33.0%を占めている点に注目すべきであろう。見方を変えれば、主体性あるいは自立心の養成と表裏の関係にあるとも考えられるが、子の立場から、あえて自閉的になりやすいと回答した点に意味があると考えられる。

家庭の中で、一般的には父と子よりも母と子のコミュニケーションが密であることは衆人の認めるところであるが、そのコミュニケーションの時間的不足が前述のような傾向を生むのではないであろうか。しかし、他の家族、例えば祖父母とかきょうだい等のコミュニケーションによる補償作用も考えられるので、この点については今後分析を深めるつもりである。

9 家族・先生・友人との親和度

親と子の、あるいは教師と児童・生徒の親和の程度を知る方法は多々あると思うが、本調査では、信頼感も含めて「困った事ができた時に誰に相談するか」と尋ねた。最も多く相談する人について集計したものが表13である。

表13 家族・教師・友人との親和度

		父	母	祖父	祖母	兄・姉	弟・妹	友人	先生	その他	N.A.	計		
母親の就労別	小学生	フルタイム 8人 (7.5%)	48 (45.3)	2 (1.9)	6 (5.7)	4 (3.8)	1 (0.9)	27 (25.5)	8 (7.5)	1 (0.9)	1 (0.9)	106 (100.0)		
		自営	20 (9.7)	89 (43.2)	0	7 (3.4)	18 (8.7)	2 (1.0)	56 (27.2)	9 (4.3)	5 (2.4)	0 (0)	206 (100.0)	
		パートタイマー	22 (10.9)	91 (45.0)	0 (0)	5 (2.5)	13 (6.4)	2 (1.0)	46 (22.8)	9 (4.5)	12 (5.9)	2 (1.0)	202 (100.0)	
		内職	4 (6.3)	34 (53.1)	1 (1.6)	2 (3.1)	6 (9.4)	0 (0)	8 (12.5)	9 (14.1)	0 (0)	0 (0)	64 (100.0)	
		(家事)	23 (7.8)	158 (53.6)	1 (0.3)	3 (1.0)	18 (6.4)	1 (0.3)	64 (21.7)	21 (7.1)	5 (1.5)	0 (0)	295 (100.0)	
		大学生	フルタイム	5 (5.5)	54 (59.3)	1 (1.1)	1 (1.1)	6 (6.6)	3 (3.3)	19 (20.9)	1 (1.1)	1 (1.1)	0 (0)	91 (100.0)
			自営	3 (2.1)	63 (44.1)	1 (0.7)	3 (2.1)	11 (7.7)	0 (0)	58 (39.9)	1 (0.7)	1 (0.7)	3 (2.1)	143 (100.0)
			パートタイマー	0 (0)	22 (64.7)	0 (0)	0 (0)	2 (5.9)	0 (0)	10 (29.4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	34 (100.0)
			内職	1 (2.4)	24 (58.5)	0 (0)	0 (0)	1 (2.4)	0 (0)	14 (34.2)	1 (2.4)	0 (0)	0 (0)	41 (100.0)
			(家事)	6 (3.2)	118 (63.2)	0 (0)	2 (1.1)	12 (8.0)	0 (0)	43 (23.1)	1 (0.5)	1 (0.5)	3 (1.6)	186 (100.0)
学校別	小学生	62 (10.5) \downarrow *	350 (59.1) \downarrow *	4 (0.7)	23 (3.9)	49 (8.3)	0 (0)	42 (7.1) \downarrow *	58 (9.8) \downarrow *	1 (0.2)	2 (0.4)	592 (100.0)		
	中学生	17 (5.4) \uparrow *	89 (28.1) \uparrow *	0 (0)	2 (0.6)	14 (4.4)	6 (0.9)	161 (50.8) \uparrow *	3 (0.9) \uparrow *	23 (7.3)	2 (0.6)	317 (100.0)		

(注) 複数の回答があったものについては比例配分により調整した

〔設問〕 小学生のころ、自分で解決できない事が出来た時、だれに、より多く相談しましたか。

小学校低学年生には父・母の複数の回答が見られたため、比例配分により集計した。その結果は、小・中学生においても大学生の回想においても母親との親和度が圧倒的に高く、母親の就労形態別に有意の差は認められない。

親和度の移行は子どもの発達段階によるものであり、小学生と中学生の比較を試みた結果、母親・父親・教師に相談する割合は中学生になると急激に低下し、逆に友人に相談すると回答した者が50.8%の高率を示している。また、中学生の回答では「その他」が増加しているが、これは「内容により」あるいは「時と場合により」異なるというものである。

IV 要 約

1. 小学校低学年時においても在宅就労も含めると約55%の母親が就労しているが、中学生の段階では約70%の就労率となっている。女性のライフサイクルの変化に伴い、地方においても、濃密な育児期間終了後はもとより育児期間の就労も急速に高まっている。
2. 母親の就労理由について小・中学生と大学生の推測並びに母親自身の回答を比較すると、

三者間にずれが見られる。小・中学生は経済的理由を挙げている者の割合が高く、反面、生きがいと回答している率は母親が最も高く20.8%であるのに対し、大学生は12.1%、小・中学生は8.0%となっている。

3. 就労している母親の姿を子の目で捉えた結果は就労形態別に差があり、フルタイムの場合は「疲れて苦勞していた」「生きがいを持っていた」に集中し、内職の場合は外勤就労に比較して「もっと社会に目を向けてほしかった」が多く、家事専業の場合は「子どもの世話をやきすぎていた」と過保護の傾向を指摘するなど、母親の姿をかなり適確に把握している。
4. 母親の就労による寂寥感は、小学生時代は学年にかかわらず半数の者が感じているが、中学生になると急激に低下している。また男女間に格差があり、女子は寂寥感を抱く率が高い。
5. 寂寥感を抱かなかった者の回答から推測し、寂寥感が強いのは、核家族で友人が少ない場合、しかも、母親の就労の必要性を十分理解できない場合と考えられる。また、母親の就労開始時から、一定の生活パターンが完成するまでの期間も寂寥感の緩和に留意する必要があるであろう。

しかしながら、母親の就労継続に関する回答では「仕事をやめてもらいたかった」とするものは、内職の0%からフルタイムの7.7%の間の値で、極めて低率であり、「仕事を続けてほしかった」「何とも思わなかった」と継続を支持する率は、内職の83.0%を筆頭にかんりの高率を示し、最低のフルタイムの場合でも48.4%となっている。

6. 母親が家事専業の場合、母親の就労に反対する者の率は小・中学生間、女子・男子間に有意の差が認められ、いずれも前者が高い率を占めている。

しかし、母親の「見てくれる者がいても就労する気はなかった」という回答の60.2%に比較すると、子の側の就労に反対する率の方が低く、40.6%となっている。

7. 大学生は、生活体験を通して、母親の生き方を肯定したり否定したりしつつ各自のライフスタイルを考えているが、短大生と大学生間並びに男子学生と女子学生間に、女性の就労に対する意識の差が見られ、大学の女子学生が最も就労意識が強い。
8. 母親の就労による影響は、プラスの面もマイナスの面も、共にフルタイムの場合が最も大である。内職の場合はあまり影響がなかったと受け止めている。

しかし、プラスの影響とマイナスの影響を比較すると、プラスの影響があったと受け止めている者の割合が高く、特にフルタイムの場合にその傾向が強い。

また、性別比較によれば、女子の方がより影響があったと回答している。

9. 小学生時代は母親に対する親和感は極めて高く、就労形態による差は見られない。相談事の内容により相談相手に変化するのとは当然の事ながら、回数の点から見ると中学生になると友人を選ぶ率が高くなり、親和度が母親から友人に移行している。

V 結語・今後の課題

以上、母親の就労に伴う子の側のさまざまな感じ方、受け止め方を考察したが、総括すると、母親の就労が子どもに好ましからざる影響を与えているという通念は否定することができるようである。

母親が就労している子ども達は、母の在宅を願う気持がありはするが、就労に対して否定的な者は極めて少なく、自分達のため、家族のために働いてくれているという気持が強い。大学生では、仕事に生きがいを持っている母親の姿もかなり理解できることが、調査の結果にも表

われているが、母親自身よりも「生きがい感」「社会との接触」等の経済的理由以外の回答が、複数回答にもかかわらず少なく、小・中学生の場合はさらに低率である。

就労理由は、本人や夫の職業と帰属階層、居住地域の実状、本人や家族の意識等により異なることは当然であるが、子の側の受け止め方が経済的理由に集中している点は注目に値する。

母親が仕事をするものの人間的意味を子どもにも伝えることは必要であろう。決して、母親の就労のみを奨めるものではないが、伝統的性別役割意識の固定観念に捉われず、女性も生き方を選択できるという認識を持つことにより、大学生の就労意識もさらに変化すると考えられる。

母親の就労に対する賛否については就労婦人の子と家事専業の子の間に大差があり、前者は反対が極めて低率であるのに対し、後者は40%以上が反対の意向を示している。各家庭には現在の生活リズムがある。慣れた生活リズムが変化することには抵抗があり、無理も生ずるため、家事専業の子に就労反対の回答が多いものと推察される。就労者の子の寂寥感を持たない理由の中で「慣れているから」という回答が約22%を占めている点も、このことをもの語るものと考えられる。従って再就労の場合、その時期によっては子どもに与える影響が大であることは否定できない。

また、寂寥感を持たなかった理由の中で最大値を占めているのが「友人がいたから」という回答であったこと、さらに、相談相手として友人を第一位に挙げた者が中学生段階で50.1%を占めていたこと等を考え合わせ、交友関係が寂寥感に大きく関わっていることが明確である。この点から考え、現代の地域の連帯感の薄弱化、子の孤立化傾向の進行は問題である。過去に見られた年齢階層制の遊び集団に代わるもの、例えば学童保育等が求められるところである。

子の生活習慣や性格形成上の問題に関して、就労者の子は自立心や持久性等が育成されたと自己評価している者が多く、フルタイムの場合は特に高率を示している。

今回の調査の分析の範囲では、母親の就労が直接的に好ましくない影響をもたらすという結果は見出されなかったものの、母親の就労時間帯、母親の就労による家族関係上の亀裂、あるいは放任等の問題があることに否定の余地はない。しかし一部の間接的影響をして、全体を語ることは誤りであろう。これらは母親の就労以前の問題であり、就労者自身、あるいはその家族の姿勢に係わることを強調したい。

本報においては、家族形態やきょうだいの有無に関する考察にまで及んでいないが、今後、分析を続ける予定である。

また、母親の就労の問題を取り上げる場合、就労に対する意識や姿勢、夫と妻の関わり、父親と子の接触状況、家族の家事参加等を除外して語ることは片落ちであろう。そのような面に関しての研究は今後の課題としたい。

稿を終えるに当たって、アンケート調査にご協力下さったお母様方、児童・生徒・学生の皆さん、並びにアンケートの配布、回収等の労をお引き受け下さった諸先生に厚く御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 労働省婦人少年局編：婦人労働の実情，大蔵省印刷局，p.14～p.15（1983）
- (2) 女子の労働力率は15～19歳の在学期は低く，20～24歳で高まり，25～34歳の出産・育児期に低下し，35～54歳に再度上昇した後55歳以降は下降するというM字型カーブを画いている。
- (3) 経済企画庁総合計画局編：2000年の日本—20年後の国民生活の予測調査一，大蔵省印刷局，（1982）

- (4) 第2回調査は1981年9月10日～9月21日に行なったもので、調査対象者は有識者500名である。
- (5) 向後正, 田村健二, 岡田守弘, 高橋種昭, 樋口恵子, 駒野陽子, 遠藤豊吉共著: 共働き, 共立出版, p.20 (1983)

〔参考文献〕

- (1) 岩男寿美子・杉山明子: 働く母親の時代, 日本放送出版協会 (1984)
- (2) 向後正・田村健二他: 共働き, 共立出版 (1983)
- (3) 久田恵: 母親が仕事を持つとき, 学陽書房 (1983)
- (4) 女性の生活史研究会: いま女性は, 福村出版 (1981)
- (5) ウィリアム・J・グード: 家族, 至誠堂 (1976)